

うお み づか

とう えん じ

魚見塚古墳・東淵寺古墳

～古墳時代後期の出雲東部で最大級の前方後円墳～





意宇平野周辺における6世紀後半の主要古墳

松江市南部にある八雲立つ風土記の丘周辺は、島根県内でも重要な遺跡が集中する地域で、その実態を解明するために島根県教育委員会では昭和48年より継続的に発掘調査を行っています。

平成23年から26年度には、出雲を代表する大型古墳である魚見塚古墳（松江市朝酌町）と東淵寺古墳（松江市大庭町）の発掘調査を実施しました。この二つの古墳は、これまで正確な規模や古墳の形、つくられた時期等がよくわかっていませんでしたが、今回の調査で築造年代や古墳の形がおおむね明らかになりました。

そこで、発掘調査で明らかになった内容と、発掘成果からわかった新たな出雲の古代史像についてご紹介します。

魚見塚古墳とはー橋北地域最大の前方後円墳ー

魚見塚古墳の調査からわかったこと

魚見塚古墳は松江市朝酌町に所在する全長約62mの前方後円墳です。出雲東部では最大級の前方後円墳であるにもかかわらず、これまで正確な大きさやつくられた時代はよくわかっていませんでしたが、今回墳丘の各所にトレンチ（試し掘りの溝）を設けて調査したことにより、いろいろな事実が明らかになりました。

① 葺石・周溝・埴輪が存在しない

大型の前方後円墳に通常見られる、葺石や埴輪、周溝がありませんでした。

② 後円部の西側で溝が見つかった

後円部の西側で幅約3mの溝が見つかりました。溝の底からは完形の蓋付きの須恵器高環2セットが出土しました。土層の堆積の様子や出土遺物から、溝を掘って高環を置いてからすぐ埋めたものと考えられます。古墳の周溝ではなく、古墳築造に伴うお祭りなどを行っていたのかもしれません。

③ 古墳の作り方がわかった

標高14.5m付近で墳丘築造時の地表面を検出しました、このことから、墳丘の下半部はもとの山を削り出して古墳の形を整え、古墳の周辺を削った土をその上に盛って墳丘をつくっていたことがわかりました。

④ 須恵器がまとめて出土

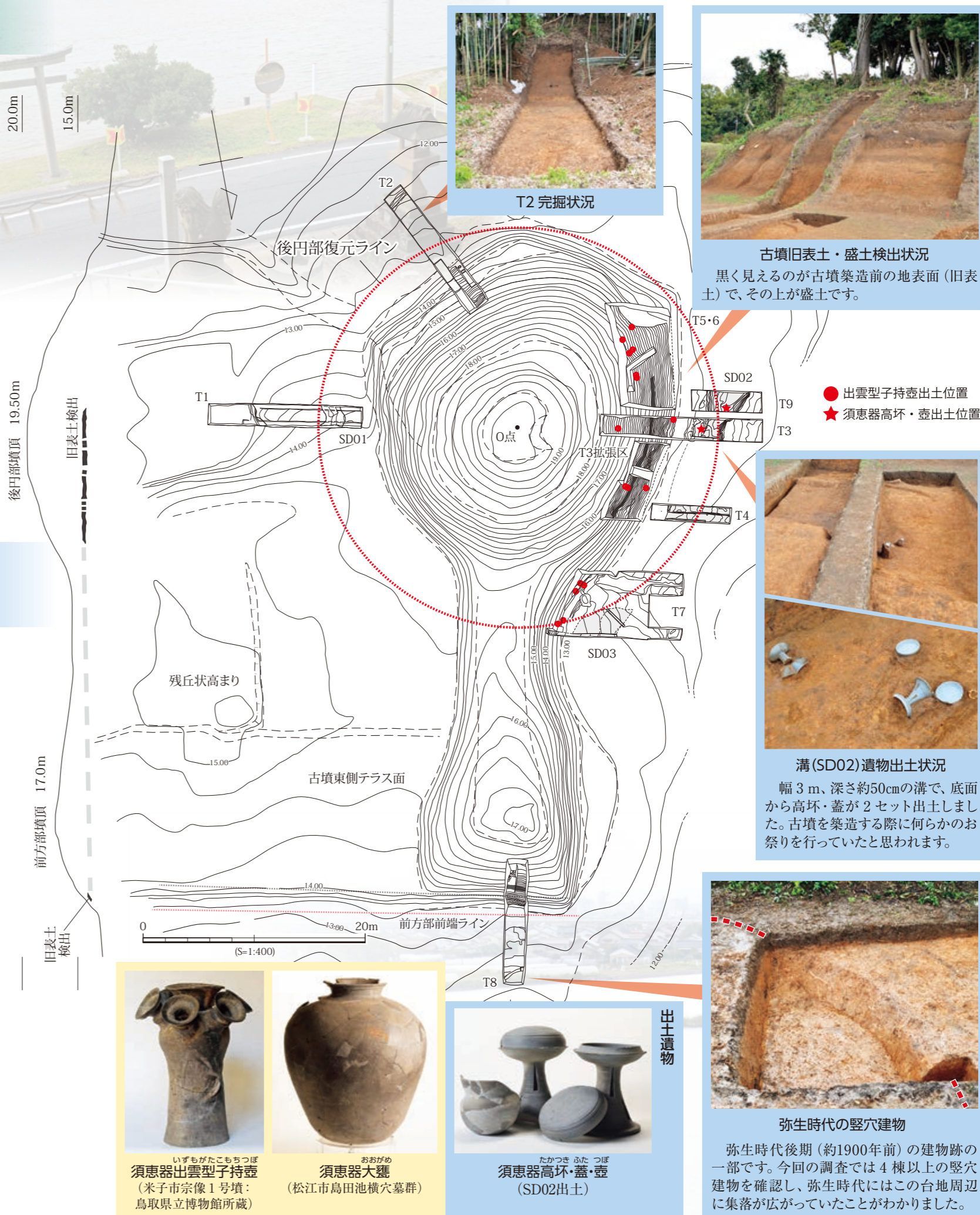
墳丘上から出雲型子持壺と呼ばれる特殊な須恵器や大甕が多数出土しました。出雲型子持壺は埴輪のように墳丘上面に多数立てられていたようです。

⑤ 古墳のつくられた年代がほぼ判明

出土した須恵器から、古墳の築造年代は6世紀後半頃（550～600年頃）であることがわかりました。

まとめ

これまで魚見塚古墳は墳丘の形状などから4～5世紀頃の古墳と考えられてきましたが、今回の調査で6世紀後半につくられた前方後円墳であることが明らかになりました。この古墳は松江市橋北地域（大橋川より北の地域）では最大の前方後円墳で、松江市北部（奈良時代の島根郡）一帯を治めていた首長の墓と考えられます。



東淵寺古墳 — 出雲東部最大級の前方後円墳 —

松江市大庭町に所在する東淵寺古墳は、以前からこの地域を代表する大型古墳として知られていました。これまで地形観察などから前方後円墳といわれていましたが、改変が著しいため正確な墳形や規模、築造年代は不明なままでした。そこで当古墳の実態を解明するため、古墳の要所にトレンチを設けて発掘調査を実施しました。

東淵寺古墳の調査からわかったこと

東淵寺古墳の周辺は中世以降の度重なる改変によって地形が大きく変わっていましたが、調査により古墳の形態やおおよその規模を明らかにすることができました。

①古墳の形やおよその規模がわかった

第6・7トレンチで、後円部から前方部へ屈曲するくびれた箇所を確認したことから、この古墳が前方後円墳であることがわかりました。墳丘規模は前方部の大半が壊れているため確かなことはわかりませんが、周辺の調査結果や地元での言い伝えなどから、全長67～70m前後と考えられます。このことから、当古墳は手間古墳（松江竹矢町）と並ぶ出雲東部で最大級の前方後円墳であることが明らかになりました。

②大規模な古墳の周溝が見つかった

後円部の西側では、幅8.6m、深さ1.2mの大規模な周溝を確認しました。同様な周溝は以前に松江市教育委員会が行った後円部南側での調査でも確認されており、少なくとも古墳の南側と西側には大規模な周溝がめぐっていたことがわかりました。

③古墳の作り方がわかった

墳丘のかなりの部分は失われていましたが、古墳の下部は地山を削り出して古墳の形を整え、その上に周溝を掘った土を盛ってつくられていることがわかりました。盛土は黄色い土と黒い土を交互に積み上げてつくられており、葺石は少なくとも下段には葺かれています。このような墳丘の作り方は、近くの山代二子塚古墳や山代方墳の作り方と共通する特徴です。

④古墳の周溝から須恵器や埴輪がまとめて出土

出雲型子持壺と呼ばれる古墳祭祀用の須恵器が大量に出土したほか、皮袋形土器と呼ばれる珍しい須恵器も出土しました。また、埴輪も周溝から大量に出土し、円筒埴輪のほか人物や動物を模倣した形象埴輪もありました。

⑤古墳のつくられた年代が判明

須恵器や埴輪の特徴から、築造年代は魚見塚古墳とほぼ同時期の6世紀後半頃（550～600年頃）と考えられます。

まとめ

今回の調査で東淵寺古墳が前方後円墳であることがわかりました。全長70m前後の墳丘規模は、出雲東部では最大級であり、山代二子塚古墳（全長94mの前方後円墳）に次ぐものです。手間古墳（全長66mの前方後円墳）、魚見塚古墳とともに、6世紀後半に出雲東部を治めていた上位首長の墓と考えられます。



発見された古墳のくびれ部（第6・7トレンチ）

くびれ部付近は後世の大規模な改変を受けていましたが、墳丘の最下段付近は残っていました。写真手前が後円部、奥が前方部で、周溝下端付近が後円部から前方部に向けて緩やかに開いている様子がわかります。



墳丘造成の様子（第4トレンチ）

写真手前が後円部、奥が前方部です。一部を深く掘り下げたところ（写真左側）、もともとは後円部と前方部との間には小さな谷があり、古墳築造時にそれを埋めて墳丘を造成していたことがわかりました。

前方部の復元案

東淵寺古墳の前方部は、後世の道路や宅地造成によって大半が失われており、正確な規模や形はわかりません。

しかし、古墳周辺での調査や周辺地形の観察から、北西方向に細く延びる形態（復元案A）か、前方部が大きく北に開く形態（復元案B）であったと考えられます。



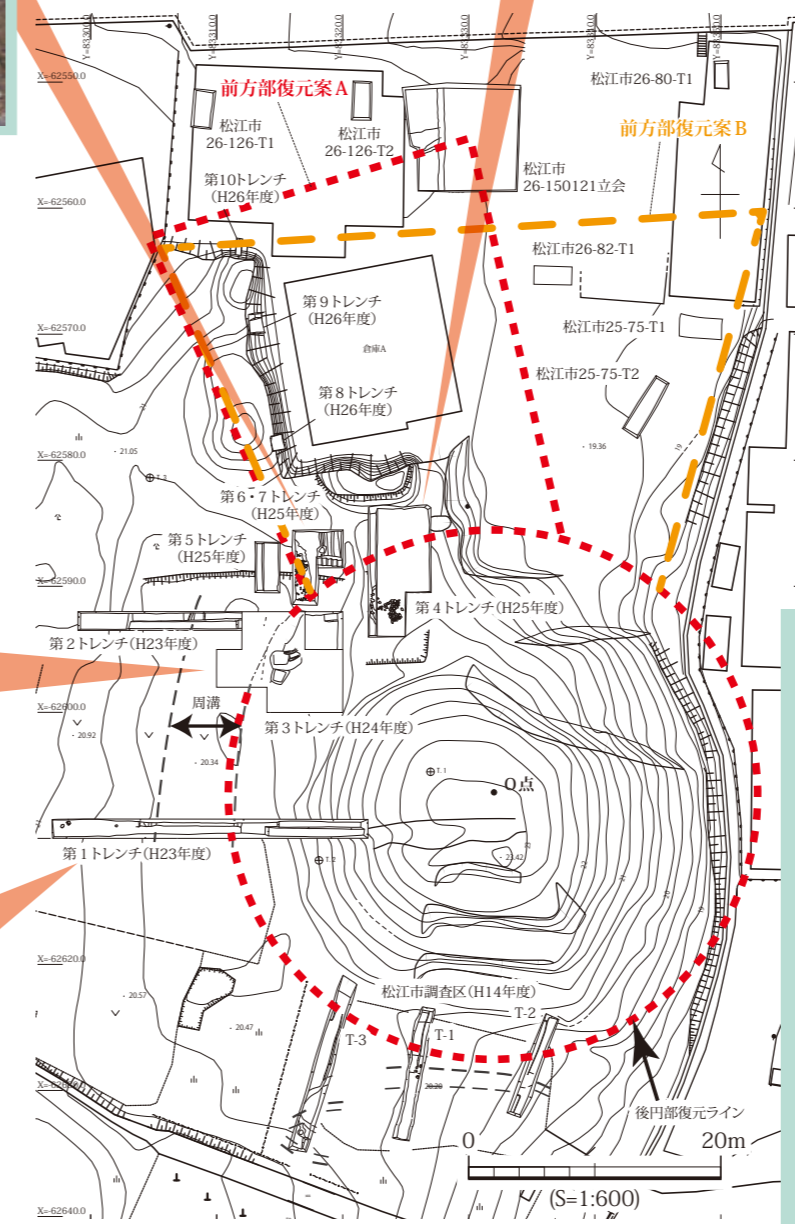
第3トレンチで発見された周溝

写真左手が墳丘側、右側が周溝です。周溝はマンガンバンドと呼ばれる硬い層を底面としています。葺石はみつかりません。



第1トレンチの調査状況

黒く見える部分が周溝内に堆積した土で、半分だけ掘った状況です。周溝は幅8.6m、深さ1.2mの大規模なもので、古墳の周囲にめぐっていたものと思われま。周溝の床面付近からは、埴輪や須恵器が多数出土しました。



墳丘祭祀に使用された出雲型子持壺（右は団原古墳）

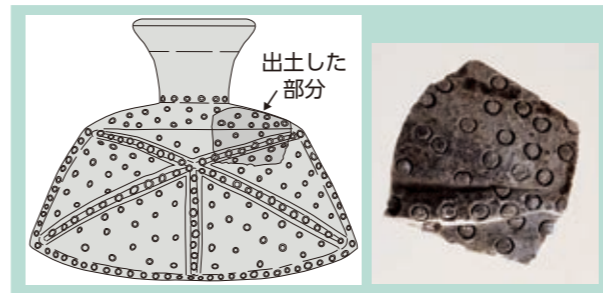
周溝から出土した須恵器のほとんどは、出雲型子持壺でした。出雲型子持壺は出雲独特の須恵器で、脚付の親壺に、子壺と呼ばれる小さな壺がたくさん付けられています。親壺や子壺は底抜けにつくられており、古墳祭祀用につくられた仮器（祭祀用の土器）です。



墳丘から出土した円筒埴輪

周溝からは須恵器とともに埴輪も数多く出土しました。埴輪は円筒埴輪と呼ばれる土管状のものが大半ですが、動物（鳥?）や矢（矢筒）を模倣した形象埴輪も若干出土しています。

円筒埴輪には、突帯が3条めぐる大型品（左）と2条めぐる小型品（右）があります。埴輪の大きさは古墳被葬者の地位を示すものと考えられ、6世紀の出雲では稀な大型品がみられることから、当古墳被葬者の地位の高さがうかがえます。



須恵器 皮袋形土器（左は復元図）

皮袋形土器は、もともとは大陸の遊牧民族が使用していた皮袋製の水筒を模倣してつくられた特殊な須恵器です。県内では当古墳を含め5例しか出土していません。

魚見塚古墳・東淵寺古墳に葬られた人は誰か？

意宇の地へ結集する出雲の首長たち

6世紀後半の意宇平野周辺には、出雲最大の古墳である山代二子塚古墳や、魚見塚古墳などの大型の前方後円墳が3km四方の狭い範囲に集中的に築かれるようになります(中央地図)。これらの古墳は30年前後の短期間に集中してつくられており、総ての古墳が意宇平野を基盤とする首長の墓ではないと思われず、下の図をみるとこの時期には意宇平野以外の出雲の多くの地域では、大型古墳がつかれなくなっていることがわかります(薄いアミ部分)。これは出雲東部各地の首長が、こぞって意宇平野近辺に古墳をつくらうとしたからだと考えられます。

時期 西暦	穴道	玉湯・乃木	古曾志・講武	大橋川北岸	大橋川南岸・意宇平野周辺	安来西部(荒島)
古墳時代中期	水溜5号 ■ 25	報恩寺 ● 50	古曾志大塚1号 ● 47 丹花庵 ■ 47	■ 82	井ノ奥1号 荒神畑 ■ 32 ■ 35	清水山1号 ■ 42
450年		大角山 ● 61 玉造築山 ● 16		■ 40	石屋 ■ 42	
500年			塚山 ■ 33 古曾志大谷1号 ■ 45	大源 ● 37 金崎1号 ■ 32	井ノ奥4号 ● 57 竹天宮前 ■ 50	宮山1号 ■ 56 宮山3号 ■ 22
550年	椎山 ● 35	林43号 ● 16 乃木二子塚 ■ 38	神主塚 ■ 19 田中谷 ■ 25	薄井原 ■ 50	向山西 ■ 19 山代二子塚 ■ 44 大庭鶴塚 ■ 44 大草岩舟 ■ 44	造山2号 ■ 50 仏山 ■ 47
古墳時代後期	伊賀見1号 ■ 25	田和山1号 ■ 15	岡田薬師 ■ 10 堀部5号 ■ 10		魚見塚 ● 62 古天神 ■ 27 手間 ● 66 東淵寺 ■ 67 岡田山 ■ 24 御崎山 ■ 40	寺輪 ■ 41
600年	林8号 ■ 20		講武岩屋 ■	■ 太田2号 ■ 朝酌岩屋	山代方墳 ■ 45 向山1号 ■ 30 団原 ■ 30 岩屋後 ■ 30 雨乞山 ■	堀津神社 ■

5・6世紀の首長墓の変遷図

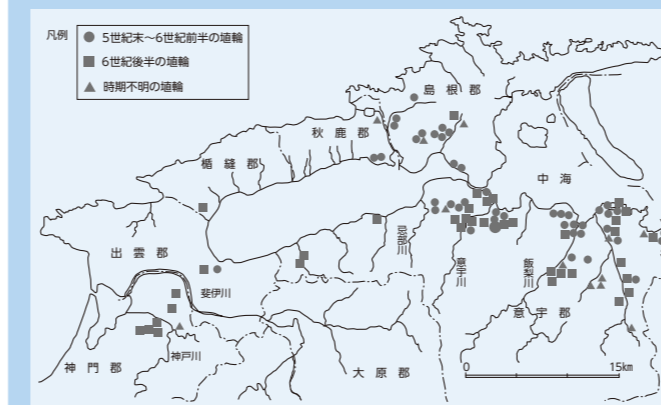
*グレーは埴輪を伴わない古墳を示す

どの地域から意宇へ結集したのか？

意宇平野周辺に古墳をつくった首長は、松江市北部や玉湯町周辺、安来平野を治めていた首長だと考えられます(上図の薄いアミ部分)。

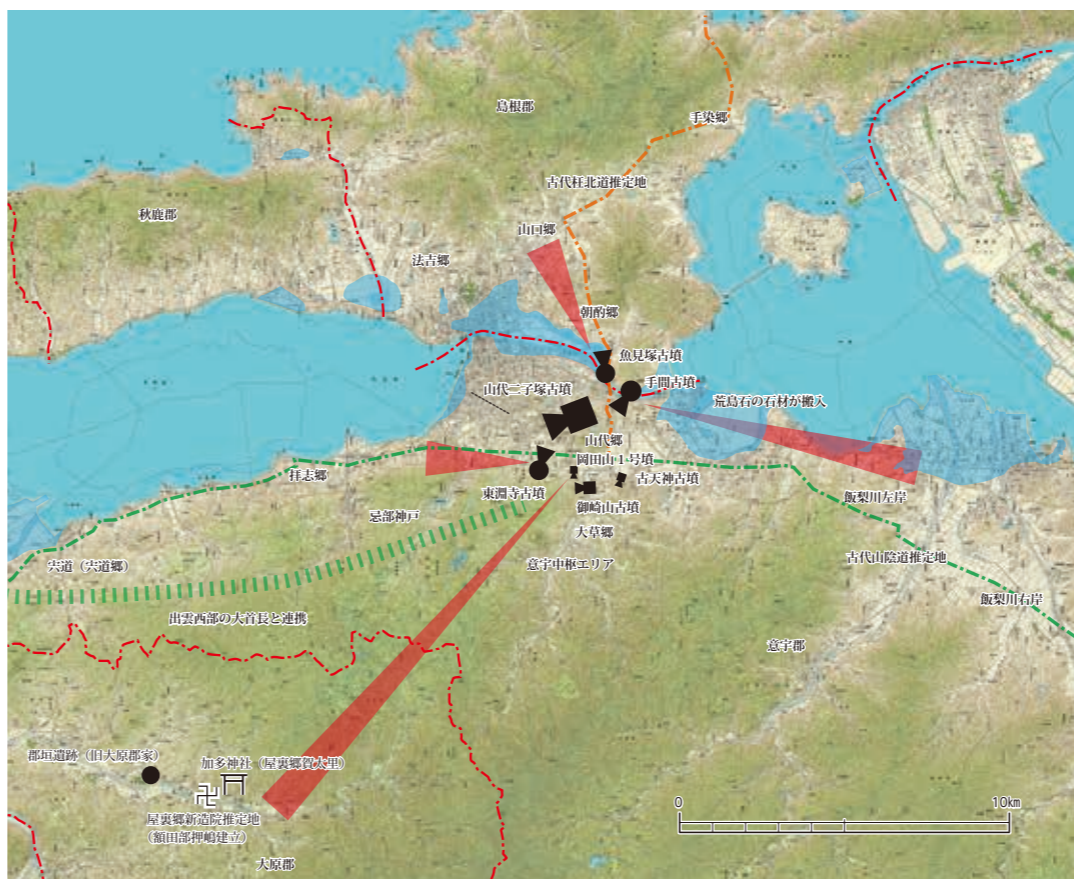
また、松江市大草町岡田山1号墳では、『出雲国風土記』に大原郡が根拠地と記された額田部氏の銘文の入った大刀が出土していることから、この古墳の被葬者は大原郡出身の額田部氏である可能性が高いと思われず、このように意宇平野には出雲東部各地の首長たちの墓が結集していたと考えられます。

Q1; 魚見塚古墳の 被葬者はだれか？



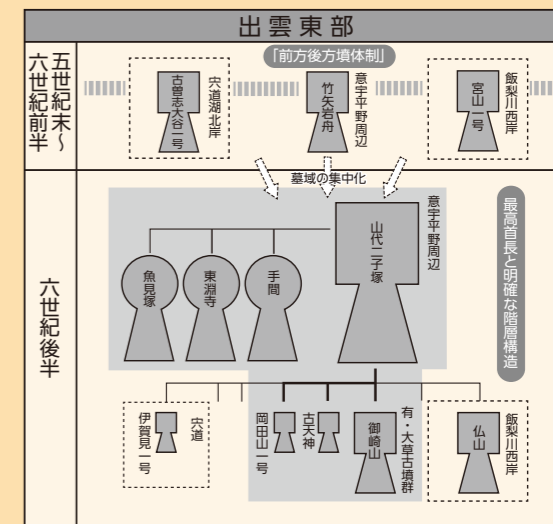
出雲における5世紀末～6世紀の埴輪出土古墳の分布

A1; 魚見塚古墳は、『出雲国風土記』に記載された古代出雲最大の交通拠点である「朝酌渡」に隣接しています。古墳のすぐ東には意宇郡と島根郡を結ぶ古代幹線道路「枉北道」が通っていました。また当古墳では埴輪が全く見つかりません。これは6世紀後半になると埴輪祭祀が廃れてしまう旧島根郡や旧秋鹿郡など、大橋川北岸の古墳の特徴と同じであることから、当古墳の被葬者も橋北地域(旧島根郡)あたりを治めていた首長であったと考えられます。

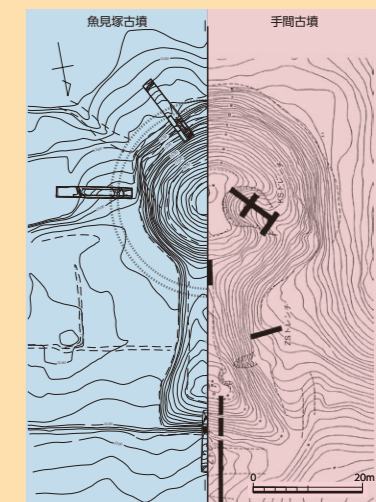


意宇中枢首長墓の序列

前方後円墳である山代二子塚古墳と、前方後円墳である魚見塚古墳・東淵寺古墳・手間古墳は同一世代内の古墳と考えられます。この点から、最大規模の山代二子塚古墳の首長とそれに次ぐ3基の前方後円墳の首長とは上下関係にあったと考えられます。また、同時期につくられた魚見塚古墳と手間古墳は大橋川を挟んで向かい合い、形や築造方法がよく似ています。これは、両古墳の築造にあたって山代二子塚古墳の被葬者である出雲東部の最高首長から、古墳の立地や規模について命令又は指示があったからではないかと考えられます。



首長墓の序列



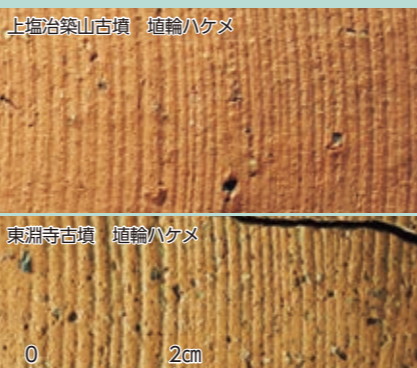
魚見塚古墳と手間古墳の比較

Q2; 東淵寺古墳の被葬者はだれか？

A2; 東淵寺古墳の埴輪は、埴輪の表面を平滑に整えるために使用するハケと呼ばれる工具に、出雲市上塩冶築山古墳と同じ工具を使用していることがわかりました(右写真)。このことから両古墳の埴輪は同じ工房でつくられたと考えられます。また、東淵寺古墳の南には古代山陰道が東西に走っていたと推定されており、当古墳はちょうど意宇中枢部への西からの玄関口に立地しています。こうしたことから、東淵寺古墳の被葬者は、出雲平野の最高首長と緊密な関係にあった首長と考えられます。



上塩冶築山古墳出土 円筒埴輪 (出雲市教育委員会所蔵)



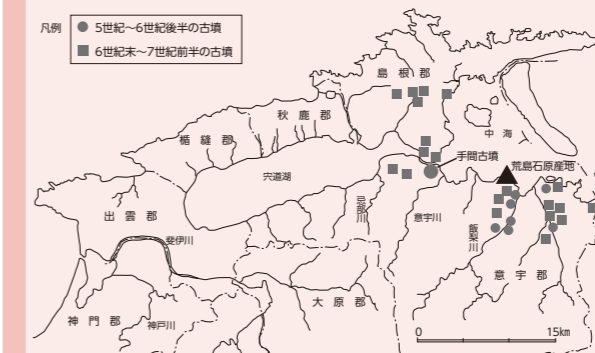
上塩冶築山古墳 埴輪ハケメ



東淵寺古墳出土 円筒埴輪

両古墳出土埴輪ハケメの比較 (実大)

Q3; 手間古墳の被葬者はだれか？



荒島石を埋葬施設に使用した古墳の分布

A3; 松江市竹矢町にある手間古墳から出土した出雲型子持壺は、意宇平野から出土している子持壺とは違うタイプで、安来・米子方面から出土する子持壺と類似しています。また、手間古墳の横穴式石室には、当時安来地域以外では使用されていない荒島石が多量に使用されていたことから、当古墳の被葬者が荒島地域と非常に深いつながりを持った首長であったことがうかがえます。



「額田部臣」銘文入大刀

新造院一所。屋裏郷の中にある。郡家の東北一十一里一百二十歩の所に在る。層の塔を建立して。前少領額田部臣押嶋の造つた寺である。(今の少領伊弉美の従兄である)



松江市岡田山1号墳

魚見塚古墳・東淵寺古墳がつくられた時代

— 6世紀(継体・欽明朝期)のヤマト王権・九州と出雲 —

魚見塚古墳や東淵寺古墳が築かれた6世紀は、ヤマト王権では継体天皇やその子の欽明天皇によって、地方支配が進められていった時代でした。特に527年に起きた九州の筑紫君磐井の乱が平定された後は、各地に王権の直轄地である屯倉が置かれるなど、地方へヤマト王権の圧力が一層強まるようになりました。



石棺式石室 (松江市向山1号墳)



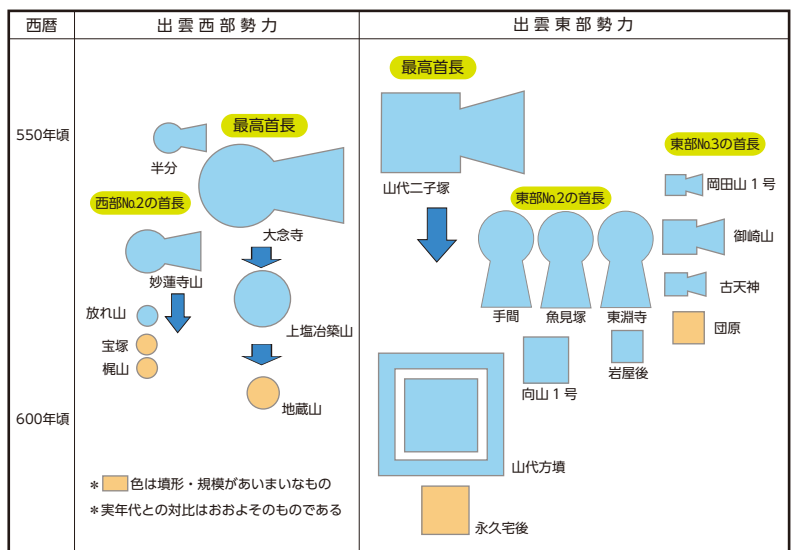
6世紀の西日本の情勢

西暦	時代	列島・東アジアのできごと	出雲のできごと
478	中期	倭王武(雄略天皇)、宋に上表文を送る	この頃、出雲で前方後方墳が再びつくられはじめる(宮山1号墳・竹矢岩船古墳・古曾志大谷1号墳)
500		畿内外出身の継体天皇が即位	
507		筑紫君磐井の乱が起きる	
527	古墳時代後期	この頃欽明天皇が即位	この頃、安来市と出雲市に日置部が置かれる(「出雲国風土記」) 出雲に横穴式石室が導入される(薄井原古墳・林43号墳) 東西出雲に最大級の古墳が築かれる(松江市山代二子塚古墳、出雲市大念寺古墳) 「額田部臣」銘文入大刀が副葬される(阿田山1号墳) 魚見塚古墳・東淵寺古墳・手間古墳の3基の前方後円墳が意宇中樞に相次いで築かれる
529		金官伽耶国、新羅に降伏し滅亡	
530		この頃百濟より仏教伝来	
538		大伽耶が新羅に滅ぼされ、伽耶全域が新羅に併合される	
562		欽明天皇を陵に葬る(見瀬丸山古墳か) 全国で前方後円墳が築かれなくなる	
571		蘇我氏、物部氏を滅ぼす	
587		推古天皇即位。翌年聖徳太子が摂政になる	
592		遣隋使が派遣される	
600		小野妹子が隋に派遣される	
607		飛鳥時代	
618	出雲屈指の大方墳である山代方墳が築かれる		
645	乙巳の変(大化の改新)		出雲屈指の大方墳である山代方墳が築かれる

出雲の地に魚見塚古墳や東淵寺古墳、手間古墳がつくられたのは、まさにこの時代に当たります。このようにヤマト王権の圧力が強まる中、出雲各地の首長たちは最高首長である山代二子塚古墳の被葬者のもと、独自の序列を形成し、出雲型子持壺などを用いた祭祀を共有することにより結束を深めていきました。この時期に意宇の地に首長の墓が集中するのは、近接した場所に墓を築くことによって強い結びつきを確認し合う意味があったと考えられます。

また、6世紀末には出雲東部の首長は、熊本県宇土地方の埋葬施設である石棺式石室を導入します。これは磐井の乱後、九州で勢力を伸ばした肥後の首長たちと交流のあった証であり、またヤマト王権からの圧力に両者が連携して対応しようとしたことを示すものと考えられます。

このように、魚見塚古墳と東淵寺古墳は、古墳時代後期の出雲の政治的交流の様子を知る上で大変貴重な古墳といえるのです。



東西出雲の古墳編年